



| | |
|--------------|---|
| Title | 奈良県吉野郡十津川村神納川地区とその周辺における固有種作物分布の調査と可視化 |
| Author(s) | 立石, 亮伍 |
| Citation | 平成28年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2017 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/60314 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

平成28年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

| | | | | | |
|---------------------|---|----------|------------------------|----|----|
| ふりがな 氏名 | たていし りょうご 立石 亮伍 | 学部 学科 | 法学部 国際公共政策学科 | 学年 | 1年 |
| ふりがな 共 同 研究者名 | なし | 学部 学科 | | 学年 | 年 |
| | | | | | 年 |
| アドバイザー教員 氏名 | 上須 道徳 | 所属 | 工学研究科附属オープンイノベーションセンター | | |
| 研究課題名 | 奈良県吉野郡十津川村神納川地区とその周辺における固有種作物分布の調査と可視化 | | | | |
| 研究成果の概要 | 研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。 | | | | |

1. 研究目的

十津川村を訪問した際に、十津川村で育てられてきた固有種作物が生産者の高齢化や後継者不足により生産維持できなくなってきたことを知り、種の保存だけでなく栽培法の継承の必要性を感じた。そこで、生産者や転入者、および役場に対しての働きかけをするために固有種作物の栽培についてロードマップを示すことを考えた。本研究はロードマップ作製に向けた大地ステップとして固有種作物の作付分布と保存方法、利用方法等を調査することを目的とする。

2. 研究計画・方法

本研究では行政および生産者に対し、半構造インタビュー方式にて固有種の分布や栽培状況、利用状況などについて情報収集を行った。

調査地域：主に奈良県十津川村神納川地区（五百瀬集落・山天集落）

訪問日時と訪問概要：

第1回 9月12日～9月13日

五百瀬に在住で、今年から固有種を作付けし始めた鈴木大介（十津川村役場・集落支援員）さんに十津川なんばなどの固有種の栽培や特徴などについて十津川村役場でヒアリングを行った。また、十津川なんばの実物も入手することができた。ヒアリングでは、村役場から固有種作物の栽培促進に関する助成金や助成金を導入したいきさつについての情報を入手することができた。

第2回 10月22日～10月23日

神納川地域活性化団体（神納川 HBP）岡田事務局長、山天地区住民3名の方に十津川なんばやむこだましなど4種類の固有種について栽培状況や用途などについて聞き取り調査を行った。

第3回 11月26日～11月27日

村役場を訪れ、土日であるにも関わらず、浦誠農林課農業委員会事務局長およびジョンフェレリ農林課地域おこし協力隊に固有種に関する話を伺った。本ヒアリングでは、当初設定していたよりも広

範囲な地域（十津川村全体）での栽培分布が得られた。

3. 研究結果・考察・成果

計3回の訪問調査で得られた内容に基づいて、報告書としてまとめた。

今回の調査研究では、自主研究による3回の調査に加え、サークルや基礎セミナーでの授業を通じ有益な関連情報を収集することができた。

3. 調査結果

当初、神納川地区およびその周辺の地域を分布調査の対象としていたが、役場の浦誠農林課長のお話から、十津川村全域の栽培分布が分かってきた。役場でも、固有種の重要性を認識しており、栽培促進・継続のための助成金を「十津川もんづくり支援事業」として拠出している。以下、助成金の概要である。まず、事業の対象は 十津川村の伝統ある農作物を活用した地域農業の活性化を行う団体・個人（村在住者、通勤者）である。1団体当たり1年間で 20万円以内の支給を行う。定額補助である。補助の対象となる作物は、ムコダマシ、十津川ナンバ、ミシマサイコ、ヤツガシラ、十津川タカナ、ヤマトトウキ、ユズ、茶の8種となっている。これらの種は、十津川村内で栽培されている系統に限られている。また十津川タカナについては、奈良県農業開発センターによる分析が行われた系統に限られている。

ここで、以上に挙げたものの中で、ヒアリング調査からわかった四つの固有種作物を各種ずつ紹介し、分布や、その特徴を示していく。

②ムコダマシ



発見の経緯……在阪テレビ局から村役場の方に問い合わせの電話があり、農林課の方が、十津川村中西部の小井地区で缶に入れ保管しているという情報を得て調査に向かったところ、保存されていたものが古すぎて発芽しなかった。あわや絶望的かと思われたところに、村南東部にある東中地区に数本植生しているところを偶然発見、確保に至った。

分布の範囲……発見に至って後、村役場は様々な地域に栽培を求めた。結果、見事に十津川村の東西南北に広がりを見せた。具体的には、村内の山天・滝川・谷瀬・込之上・出谷地区、集落である。

特徴……あわの一種。栽培面では困難な点が多い。1kgはおよそ1700円で役場関連団体に買い取られる。収穫までに時間が多分にかかり、倒れやすく、虫食いに見舞われやすく、手間賃が合わないとされる。

用途……その名の通り、婿に対して、ムコダマシをもちと見せることで米を育てているほど良い家だと見せたといふいわがあるほど、白く、餅に似ている。調査対象地域である神納川地区では、ムコダマシを用いて実際に昔と同じように餅を作つてみようという試みがなされた。また、十津川村にある公営ホテルにて、村で作られたムコダマシを使用したメニューを提供している。

②十津川ナンバ



分布の範囲……神納川地区の山天で確認。ほかの地区は未確認。

特徴……甘くなく、淡泊でもっちりしている。見た目はとうもろこしに似ている。十津川ナンバの粉は別名コーンミールともよばれる。

用途……粉にして餅に入れる。十津川村で文化祭があった際に、もちまきが行われ、十津川ナンバを実際に入れたものも確認された。

③十津川タカナ



(農林課農業委員会事務局長 浦誠氏 提供)

分布の範囲……村北部の谷瀬地区、中部の小原地区、南部の出谷地区

特徴……十津川村内でも多系統に分かれる。奈良県農業開発センターでの精密検査において、これが発覚した。確認されているだけでも4系統あり、さらに多くの系統が存在すると考えられる。主に調査した山天集落で栽培されている十津川タカナは4系統以外のものである可能性が高いとのこと。畑によって変化するのではと考えたが、違うことが判明。

用途……めはりずしに使われる。めはりずしの名はお茶碗一杯分ぐらいの大量のお米を包んで目を大きく張つて食べていたことに由来するたべもので熊野地方でよく見られる。近頃はお土産に気軽に購

入出来得るよう、少量化されて販売されている。別名が数多くある。

◎ヤツガシラ

分布の範囲……山天、および十津川村西側で栽培されている。

特徴……山芋の一種。大株と子株からなり、子株の良質なものは来年の種にするために食べずにとつておく。ここに挙げる作物の中で最も栽培が簡単。

用途……ふかして食べる。皮をむかずに塩味にふかし、食べるときに剥いて食べる。実際山天の訪問の際に頂いた。また、ふかしたあと、ポテトサラダにして食べることもある。また、焼酎の原料となる。山天で栽培されたヤツガシラは四国の焼酎製造元に原料として販売している。

4. 考察

神納川地区、特に山天という豊富な栽培地による聞き込みで得た若い労働力の不足などの事態があきらかになった。以上を踏まえ、固有種を継承するためのロードマップとして本研究の考察を述べる。

ムコダマシの件に見られるように、その存在が消滅するギリギリのところで発見されるケースがある現状から、種を保存する作業は喫緊の課題である。今回、調査を通じて実感したのが外部のアクターと村役場など内部のアクターとの連携や協働である。問題認識が共有されている一方、それぞれのアクターが持っている能力や資源などがことなり協働することで相乗効果が生まれるのではないかと考える。生産者である農家の方や行政は栽培に関する知識（無形なものから科学的なものまで）を持っている。一方、現地調査を通じて一番深刻な問題だと感じたことが、若い力の不足である。次世代の農業の担い手がほとんどいないのである。先に挙げた山天では、ご高齢の方々三名が実質共同で農業を営んでいる。山天は農林課が要請した作物の請地でもあるので、非常に重要な集落である。山天の方々にお話を伺ったところ、助け合いでここまでできる。誰かを欠くことがあれば、すぐに崩壊し、農業は終えざるをえないだろうという意見を頂戴することができた。農林課の方も若者不足に対処する手段を講じあぐねているようだった。

これから間違いなく必要になることは、①若者の農業への参加②種の保存③種の知名度の上昇の三点である。助成金事業を周知し、固有種栽培の分布を拡大することができれば局所的な災害で種が失われるリスクが軽減されるし、食べ方など文化的な多様性も維持されるであろう。

直近で取り組むことが可能なことは、若者が転入した際に、彼らに農業を推進することである。助成金事業も共に知らせれば、十津川村に住むことを選んだ人たちには着実に浸透する。また、固有種を用いた食事などを熊野古道散策者に知ってもらうことも有効な手段であろう。次に、十年越しに十津川村の全域に固有種の情報が広まるように色々な取り組みを可能であれば役場の方々と連携して行いたい。その手段は、役場が村全体に発信している雑誌があるので、そこに広告すればよい。ただ載せるだけでは注意を引くのに十分ではないので、ストーリー仕立てにしたり、実際に助成金を用いて農業を始めた、あるいは継続的に取り組んでいる人たちのインタビューなどを載せたりすることが必要だ。具体的には、現在授業で取り組んでいる固有種に関するパンフレットを役場や熊野古道の人が集まる観光地に設置したり地域内の方に配布したりする。村外だけでなく、村内の方にも固有種の魅力や重要性を理解してもらうのである。英語版も作成し、海外からの散策者に固有種を知ってもらうことで、種の知名度を上げることも重要である。その中で一握りでも十津川の食文化や自然に魅入られる人が増えれば、交流人口や定住人口につながる可能性も持っていると考える。

5. 謝辞

さて、この度は大阪大学の自主研究の助成金をいただき、様々な調査をすることができた。当研究を支援いただいた大阪大学教育・学生支援部教育企画課の皆様には御礼申し上げたい。研究を遂行するに当たっては、大学に入学して、興味に準じてサークルに入った私に調査を通じて深く十津川村を知る機会を与えてくれた先輩方、研究についてアドバイスをしていただいた上須先生、栗本先生、そして十津川村神納川地区および十津川村役場農林課のみなさまには心より感謝している。

6. 参考文献

1. 藻谷浩介 NHK 広島取材班『里山資本主義』角川書店 308pp.
2. 島原万丈 HOME'S 総研『本当に住んで幸せな街』光文社 221pp.
3. 平田オリザ『下り坂をそろそろと下る』講談社 238pp.
4. 井下千以子『レポート・論文作成法』慶應義塾大学出版会 156pp.